

保育現場における歌唱教材の実態調査に関する文献検討

竹下 可奈子¹⁾*

1) 新見公立大学健康科学部健康保育学科

(2020年11月18日受理)

保育現場では、歌唱教材の選択が各園や各保育者にゆだねられており、その実態の把握が難しい側面がある。そのため、保育現場における歌唱教材の実態調査の第一歩として、先行研究における調査の方法およびその結果について比較検討することとした。その結果、年間を通した全国的な調査の必要性および、保育現場で取り扱われていると予想される歌唱教材を網羅したリスト作成の重要性が明らかとなった。また、多様に変化を重ねる「あそびうた」に対応した調査の重要性も示唆された。今後はこれらの条件を満たす新たな調査を実践していくことが課題である。

(キーワード) 保育現場、歌唱教材、実態調査、文献検討

1. はじめに

歌う活動は乳幼児の音楽表現の中心であり、保育の場面に歌は欠かせない¹⁾。しかし、就学前教育には小学校や中学校のような定められた教科書や共通教材がなく、保育現場における歌唱教材の選択は各園や各保育者にゆだねられている。そのため、使用される歌唱教材は園や保育者によってばらつきがあると考えられ、保育現場全体の傾向については把握が難しい側面がある。

どのような歌唱教材が保育現場で取り扱われているのか、その実態をあらわす情報は、現場における歌唱教材選択および歌唱活動の質的向上を目指すうえで非常に価値あるものである。また、保育者養成課程における歌唱指導においても、その情報は貴重な指針となりうる。そのため、保育現場で取り扱われる歌唱教材の実態データは極めて重要であるとともに、多種多様な現場を広く網羅したものであることが望ましい。

これまでも様々な研究において、保育現場で用いられる歌唱教材の実態調査が行われてきた。しかしその調査方法は研究により多様であり、調査の方法によっては異なる結果を示す場合もある。したがって、先行研究全体を検討し、より包括的に実態を把握できる調査のあり方を示すことが必要であると考えられる。

本稿の目的は次の2点である。まず1点目は、保育現場における歌唱教材の実態を調査した先行研究を検討し、そこから調査方法による結果の差について考察することである。そして2点目は、歌唱教材実態調査の課題を整理し、今後の研究の方向性を示すことである。

2. 保育現場における歌唱教材の実態調査研究の現状

2-1. 歌唱教材実態調査が行われた先行研究

表1には、これまでに行われたおもな歌唱教材の実態調査研究をまとめている。1973(昭和48)年から断続的に研究が行われており、計24本確認することができた。ちなみに、実態調査が行われた研究であっても、研究者の恣意的判断による選曲がなされている研究や、具体的な曲名が明らかにされていない研究は、表に含んでいない。

先行研究の研究目的は、大きく2つにわけられる。すなわち、保育現場での歌唱教材選択の実態を読み取ること自体が目的の場合と、楽曲分析の対象となる曲を絞りこむための前段階的な目的の場合である。前者の場合、その結果をもって保育者養成課程における子どもの歌の指導のあり方や望ましい歌唱教材の方向性が探られるなどしている²⁾。後者の場合は、調査によって明らかになった歌を用いて、それらが乳幼児の発達に適した楽曲であるかどうか分析されることが多い³⁾。分析の観点は多岐にわたっており、歌詞、和声、拍子、調性、音域、曲の長さ、分類などである。また、歌い継がれている歌とそうでない歌の違いについて考察したものもある⁴⁾。

次に調査対象と調査方法について述べる。まず調査対象は、保育者、保育者養成課程に在籍する学生、教材曲集の3種類である。調査方法は、調査対象に応じて異なっている。

3種類の調査対象の中では、保育者を対象としたもののがもっとも多い。24本中14本で現場の保育者を対象とした質問紙調査もしくは聞き取り調査が行われている。質問紙調査の場合は、研究者があらかじめ提示した曲の中から選択

*連絡先: 竹下可奈子 新見公立大学健康科学部健康保育学科 718-8585 新見市西方1263-2

表 1 おもな歌唱教材実態調査研究

出典	方法	対象 ^{注1)}	地域	選出条件
狩野(2019) ⁵⁾	聞き取り調査	保育者	島根県	F 幼稚園で 2018 年度 1 年間に取り上げられた歌
山崎(2019) ⁶⁾	資料調査	教材曲集	—	分析対象の教材曲集 10 冊のうち、半数以上に共通して選曲されていた歌
連(2018) ⁷⁾	質問紙調査	学生	石川県	保育実習等で保育者が歌っていたことで知ることができた歌
太田ほか(2018) ⁸⁾	質問紙調査	保育者	愛知県	①研究者が提示した 30 曲のうち、過去 2, 3 年間の間に保育活動の中で歌った歌 ②調査時点 1 ヶ月までに保育活動に取り入れた歌
朴(2017) ⁹⁾	聞き取り調査	保育者	大阪府	11 月の 1 ヶ月間のうち、歌唱活動で歌う季節の歌や当月の歌、発表会用に取り組み始めた歌
笠井ほか(2015) ¹⁰⁾	質問紙調査	保育者	福岡県 長崎県 熊本県	研究者が提示した手あそび歌 65 曲のうち、以下に該当する歌 ① 頻繁に歌っている歌、②うたったことがある歌、③園でよく使われる歌
秋山(2012) ¹¹⁾	質問紙調査	保育者	東京都	①季節・行事にこだわらず年間通して歌われる歌 ②季節ごと、行事で歌われる歌 ③園児が日頃好んでいる歌（手あそび、伝承わらべうた等も含む）
児嶋(2009) ¹²⁾	資料調査	教材曲集	—	分析対象の教材曲集 112 冊のうち、掲載冊数の多い手あそびうた上位約 50 曲
岩口(2008) ¹³⁾	資料調査 質問紙調査	教材曲集 (保育者)	全国	①分析対象の教材曲集 10 冊のうち、2 冊以上で重複した 106 曲 ②自由に挙げてもらった日頃の保育で活用頻度の高い子どもの歌の中から、4 件以上あがった歌
河原田(2008) ¹⁴⁾	質問紙調査	学生	静岡県	6 月に実習園で歌われていた日常歌う歌や季節の歌
河原田(2007) ¹⁵⁾	質問紙調査	学生	静岡県	12 月に実習園で歌われていた日常歌う歌や季節の歌
多保田(2004) ¹⁶⁾	質問紙調査	保育者	北陸 3 県	研究者が提示した 144 曲のうち、最近 1 年間で用いた歌
中村(2005) ¹⁷⁾	質問紙調査	学生	不明	実習期間中、幼稚園で歌っていた歌
木目田ほか(2000) ¹⁸⁾	質問紙調査	学生	不明	実習期間（1 月末～2 月上旬の 2 週間）の中で歌われていた歌
岩口(2000) ¹⁹⁾	資料調査	教材曲集	—	分析対象の教材曲集 7 冊のうち、3 冊以上で重複していた歌
山浦ほか(1997) ²⁰⁾	質問紙調査	保育者	近畿圏	1996 年度の 1 年間で歌った歌
青木(1996) ²¹⁾	質問紙調査	保育者	近畿圏	1994 年度 1 年間で歌唱教材として取り入れられたすべての歌
多保田(1995) ²²⁾	質問紙調査	学生	石川県	実習中、毎日歌っていた歌
梅澤(1995) ²³⁾	質問紙調査	保育者	愛知県 三重県	4～11 月の間にクラスで歌った歌すべて
井口(1993) ²⁴⁾	質問紙調査	保育者	不明	研究者が提示した曲のうち、ここ数年間に取り上げた歌
多保田(1993) ²⁵⁾	質問紙調査	保育者	北陸 3 県	研究者が提示した 270 曲のうち、使用している歌
白石(1989) ²⁶⁾	質問紙調査	保育者	福島県	研究者が提示した 125 曲のうち、保育所で扱っている歌
村山(1977) ²⁷⁾	質問紙調査	保育者	全国	園でよく歌う歌 3 曲
宮崎(1973) ²⁸⁾	質問紙調査	保育者	不明	研究者が提示した 167 曲のうち、 ①1 年間で歌唱教材として使用した歌 ②特に幼児が喜んで歌った歌

してもらうものと、完全な自由記述のものの2種類にわけられる。質問紙調査の割合としては、選択式が7本、完全な自由記述式が4本と、選択式の方が多い。選択式の場合、研究者から提示される曲はもっとも少ないものが30曲、多いものが167曲と、曲数に幅がみられる。また、提示される曲の内容については、研究の目的に従ってそれぞれの規準で独自に選出されている。したがって、手あそび歌のみなど、ジャンルが絞られたものもある²⁹⁾。また、回答する歌についても「1年間で歌唱教材として使用した曲」³⁰⁾、「ここ数年間で取り上げた歌」³¹⁾、「園でよく歌う歌」³²⁾など様々である。一方、聞き取り調査の場合は、提示曲は使用せず規定の期間中に園で取りあげられた歌をすべて記録するなどしている。子どもの年齢は指定されていないものが多いが、研究によっては3歳以上のクラスに限定されている。

次に、保育者養成課程に在籍する学生を対象とした研究は6本あった。それらの研究では、実習を経験した学生に、実習期間中に園で取り上げられていた歌を自由記述式の質問紙調査によって報告させている。また同時に、実習とは関係なく学生が知っている歌等についても調査されていたが、「保育現場における歌唱教材実態調査」という本稿の主旨とは一致しないため、そちらの結果は次項でのデータ集計には含めていない。実習期間中に見聞きした歌の報告であるため、調査期間が6月や10～11月もしくは1～2月に限定されているのが特徴的である。

最後に、教材曲集を対象とした研究は4本であった。これらはすべて資料調査となる。うち3本は7～10冊の教材曲集を調査対象としているが、児嶋(2009)は112冊の教材曲集を調査している。これらの先行研究は、どれも掲載冊数の多い歌を「保育現場で頻繁に使用される歌」と定義している。ただし、何冊をもって「多い」とするかは研究によって差がある。

またそれぞれの調査期間^{註2)}に目を向けると、もっとも短い期間は2週間で、すべて学生を対象としたものであった。先述のように、学生を対象とした調査は実習期間中に限られていたためである。ほかに聴き取り調査で1ヶ月に限定して調査されたものもあったが³³⁾、それ以外はすべて1年以上を対象としていた。また、期間を限定していない調査もあった。

調査対象地域については、今回取り上げた先行研究では13都府県および近畿圏(詳細な地域は不明)での調査が行われていた。調査対象が「全国」の先行研究も2本あるが、うち1本は教材曲集を対象とした調査の補足的な位置付けとして行われたものであった³⁴⁾。

次項では、先行研究の具体的な調査結果と調査方法による結果の差について考察する。

2-2. 先行研究に提示された「保育現場で頻繁に取り上げられる歌唱教材」とその傾向

先行研究からは、465曲の歌唱教材が示された。それらについては、曲種の大まかな傾向を考察するために、7つに分類した。内訳は、「季節のうた」「生き物のうた」「生活のうた」「行事のうた」「気持ちのうた」「定番のうた」「あそびうた」である。この分類については、おもに狩野(2019)、笠井ほか(2015)、児嶋(2009)における分け方を参考にした。7つの分類のうち、とくに「あそびうた」についてはそのほかの分類との判断が困難な面があるが、手あそび歌に絞り調査を行っている笠井ほか(2015)、児嶋(2009)において「手あそび」と判断されている歌はすべて「あそびうた」に含めた。

参考までに、全体の4割(10本)以上の先行研究において共通して提示されていた歌を表2に示す。該当の歌は41曲であった。これらは条件の異なる調査方法で抽出された歌であるため、単純に「保育現場で頻繁に取り上げられる歌唱教材」と断定することはできない。しかし、複数の調査による一定の傾向は示していると考えられる。調査方法別に分析する際も、条件に当てはまる先行研究の4割以上に該当する歌を上位曲とし、それらの傾向の差を考察した。

調査方法による結果の差について考察するにあたって、(1) 調査対象(保育士、学生、教材曲集)、(2) 調査方法(選択式質問紙調査、自由記述式質問紙調査および聞き取り調査)、(3) 調査地域の3つの観点から比較分析を行った。

(1) 調査対象による傾向の差

まず、それぞれの調査対象別に抽出されたすべての曲を分類の観点から比較した結果、3つの調査対象すべてで「あそびうた」の割合がもっとも大きく、共通して全体の約4割を占めていた。また、「季節のうた」が全体の約2割を占めていた点も共通していた。

次にそれぞれの上位曲を比較すると、保育者と教材曲集を対象とした先行研究に比べ、学生を対象とした先行研究では異なる結果が出た。保育者と教材曲集を対象とした先行研究では、上位曲の4～5割が「季節のうた」でもっとも多く、「生活のうた」は両方とも1割に満たなかった。一方、学生を対象とした先行研究では「生活のうた」が5割と、もっとも大きい割合を占めていた。そして「季節のうた」は2割弱であった。

このような差が出たもっとも大きい要因は、学生を対象とした調査がどれも2週間という限定された期間であったことが挙げられる。「季節のうた」は年間を通して移り変わるため、時期が違えば抽出される歌も異なる。先行研究で学生が実習に赴いていたのは6月、11～12月、1～2月と3つの時期に分かれていたため、共通する歌が少なかったのだと考えられる。一方「生活のうた」は年間を通して同じ歌が歌われることが多く、異なる先行研究でも同じ歌が上位にきたのであろう。また、学生を対象とした調査では《食前のおいのり》などの「こども讃美歌」が何曲か抽出され

表 2. 10本以上の先行研究で曲名が挙げられていた41曲（分類ごと、50音順）

分類	曲名	分類	曲名
季節のうた	あわてんぼうのサンタクロース	あそびうた	大きなくりの木の下で
	うれしいひな祭り		かえるの合唱
	お正月		手をたたきましょう
	おはながわらった		ひげじいさん
	思い出のアルバム		バスごっこ
	かたつむり		まつぼっくり
	こいのぼり		やきいもグーチャーパー
	こおろぎ	生き物のうた	アイアイ
	コンコンクシヤンのうた		あめふりくまのこ
	しゃぼんだま		いぬのおまわりさん
	たきび		おつかいありさん
	たなばたさま		ことりのうた
	チューリップ		ぞうさん
	どんぐりころころ		もりのくまさん
	とんぼのめがね	定番のうた	おもちゃのチャチャチャ
	豆まき		さんぽ
	山の音楽家		手のひらをたいように
	雪		ふしぎなポケット
	ゆきのぺんきやさん		おかあさん
生活のうた		気持ちのうた	おぼけなんてないさ
			せんせいとおともだち
生活のうた		生活のうた	とけいのうた

ており、保育者や教材曲集を対象とした調査よりも宗教保育における「聖歌」や「賛歌」を多くすくい上げていた。このことも、学生を対象とした場合に「生活のうた」の割合が大きくなった理由であろう。

保育者と教材曲集を対象とした先行研究においては、先述したように「季節のうた」の割合が共通してもっとも大きかった。曲全体では「あそびうた」の割合がもっとも大きかったにもかかわらず、上位曲に絞ると「季節のうた」との割合が逆転した要因としては、「あそびうた」のバリエーションの多さが指摘できる。手あそび歌の教材曲集に絞り調査を行った児嶋（2009）は、調査から明らかになった手あそび歌3985曲のうち、その4割が1冊のみにしか掲載されていなかったと述べている³⁵⁾。そのように、もともと曲の種類が豊富なことに加え、「あそびうた」は本来の歌を替え歌にしたり、遊びを発展させたりと、多様に変化を重ねる特徴をもつ³⁶⁾。たとえば《ひげじいさん》は、アンパンマンやディズニ、ドラえもののバージョンが存在しており、今回の調査でもそれぞれ別の先行研究で名前が挙がっていた。保育現場で用いられる曲種の割合としては「あそびうた」がもっとも大きいものの、共通して用いられるかという視点でみると、特定の歌が定番化しやすい「季節のうた」が上位に来るのだと考えられる。

（2）調査方法による差

調査方法による差については、保育者を対象とした先行研究に限定して考察を行った。また、研究者があらかじめ曲を提示しているか否かという観点で、自由記述式の質問紙調査と聞き取り調査の結果は合わせて検討した。

全体的な曲種の傾向については、調査方法による差はみられなかった。保育者を対象とした先行研究結果全体の傾向と同じように、「あそびうた」「季節のうた」の順に多く、その割合も同程度であった。

一方、抽出された曲数を見ると、選択式での回答では182曲が抽出されたのに対し、自由記述式では303曲が抽出された。選択式のほとんどが自由記述欄も設けたとしているものの、完全な自由記述式および聞き取り調査の方が抽出される歌の種類が多いことがわかる。そして、選択式では抽出されず、自由記述式、聞き取り調査で抽出された歌の7割以上が「あそびうた」であった。「あそびうた」はバリエーションが豊富であると述べたが、その多くが自由記述式および聞き取り調査から抽出されているということがわかる。

（3）調査地域による差

調査地域による傾向の差は明らかにすることができなかった。今回扱った先行研究では調査地域に偏りがなく、

それぞれの研究でそれぞれの地域を対象としていたため、比較が困難であった。傾向に差がみられても、それが地域によるものなのか、調査方法等によるものなのか、判別できなかった。また、北海道地方と四国地方についてはこれまで調査が行われていなかった。調査対象が「全国」の先行研究も2本あるが、うち1本は教材曲集を対象とした調査の補足的な位置付けとして行われたものであり、全国的な傾向を明らかにしているものではない。また、もう1本は1977（昭和52）年に行われたものであり、すでに40年以上経過していた。

3. 保育現場における歌唱教材実態調査の課題

今後、調査結果を蓄積していくうえで、どのような点に留意すべきであろうか。検討課題として、以下4点を挙げる。

第1の課題は、年間を通じた調査の必要性である。先述したように、期間を限定した調査では抽出される「季節のうた」が限られてしまう。狩野（2019）は歌唱活動の中心が「季節のうた」であることを指摘しており³⁷⁾、保育現場においては季節に応じて様々な歌が取り扱われる。しかし、期間を限定した調査ではその全容をとらえきれない。とくに実習期間中に限定した調査では、その時期以外の「季節のうた」がとりこぼされてしまう。少なくとも1年間を対象とした調査が望ましい。

第2の課題は多様な「あそびうた」や「生活のうた」に対応した調査である。とくに「あそびうた」については、今回抽出された曲種の中でもっとも大きい割合を占めていた。笠井は保育活動の導入として「あそびうた」が日々頻繁に取り入れられている現状を指摘しており³⁸⁾、子どもが毎日接する歌として非常に重要である。また、秋山は保育の中で子どもが自発的に口ずさむ歌の40～50%をあそびうたが占めていると報告している³⁹⁾。つまり、保育現場での歌唱実態を把握するうえで「あそびうた」は避けて通れないものであると考えられる。ほかの歌と一律に行う選択式質問紙調査では「あそびうた」のすくいあげに限界があることが示唆されたため、「あそびうた」については歌い出しを記述してもらう自由記述欄を別枠で設ける等の工夫が必要であると考ええる。また、「生活のうた」についても、一般的な歌唱教材のみをリスト化した選択式質問紙調査では、園の特色や方針が反映される「生活のうた」の実態を把握しきれない可能性が指摘できる。今回の先行研究検討の結果を参考に、より幅広い歌を網羅したリストを作成することが望ましい。

第3の課題は、調査対象地域の拡大である。今回取り上げた先行研究での調査対象は13都府県および近畿圏で行われていたが、それぞれ異なる条件で調査が行われていたため地域性による比較が困難であった。保育現場では先輩保

育者が歌い継いできた歌を活用する場合も多く、実態調査の結果には対象地域の地域性が大きく反映される可能性が指摘されている⁴⁰⁾。したがって、広範囲にわたって同じ条件で調査することが求められる。

第4の課題は、歌の分類についてである。本稿では曲種の大まかな傾向を考察するため、暫定的に狩野（2019）、笠井ほか（2015）、児嶋（2009）における分類法を参考にし、歌の分類を行ったが、判断が困難な歌も多々存在した。たとえば《あめふりくまのこ》は先行研究にならって「生き物のうた」に分類したが、「季節のうた」と解釈することも可能であろう。そもそも、ある歌が「生き物のうた」なのか「季節のうた」なのか、もしくはほかの歌なのかは、保育者が活動の中でどのような意図をもってその歌を取り上げたかによって変わってくるのではないだろうか。さらに言うならば、ひとつの歌唱教材に複数の使用意図がこめられる場合も多いと考えられる。したがって、保育者の選曲意図と歌唱教材の関係については二次的な課題として扱い、歌唱教材実態調査を実施したうえで段階的に検討するのが適当と考える。

4. おわりに

これまで保育現場における歌唱教材の実態調査は、研究ごとに異なる方法で行われてきた。それらは各々の目的に沿った方法ではあったが、現場の歌唱教材の実態を包括的にとらえるためには、それらの課題点を踏まえた新たな調査が必要であると考えられる。

本稿では、先行研究で「保育現場で頻繁に取り上げられる歌唱教材」として挙げられた曲のデータを整理することができた。また、それぞれの調査方法とその結果から、新たな課題について明らかにすることができた。それらをふまえると、以下の条件を満たす調査であればより総合的に保育現場における歌唱教材の実態について明らかにできるものと考えられる。

- (1) 全国的な範囲を対象とした質問紙調査であること
- (2) 年間を通じた歌唱教材の取り扱いについて尋ねること
- (3) 先行研究を参考に、保育現場で取り扱われていると予想される歌を網羅したリストを作成すること
- (4) 「あそびうた」については、その多様さに対応できる調査法を用いること

これらの条件を満たした調査を実際に行っていくことが今後の課題である。

註

- 1) 「対象」欄における「学生」はすべて保育者養成課程に在籍する学生を指している。

- 2) ここでいう「調査期間」とは実際に調査を行った時期のことではなく、取り扱った歌唱教材を選出する際に対象となった期間のことを指す。

文献

- 1) 庄司洋江：新・保育内容シリーズ5 音楽表現（谷田貝公昭監）．一藝社, 92, 2010.
- 2) 連桃季恵：乳幼児を対象とする歌唱教材に関する研究—学生へのアンケート調査を通して—, 金沢星稜大学人間科学研究, 11 (2), 71-76, 2018. 岩口摂子：定着化した保育歌唱教材における歌詞の特徴について, 教育実践研究, 10 (1), 21-30, 2008, ほか.
- 3) 狩野麻実：幼児教育における歌唱教材に関する一考察—歌唱教材の収集と分析から—, 島根大学教育臨床総合研究, (18), 109-120, 2019. 山崎浩：幼児の歌唱表現と歌唱教材—幼児の発達に沿った選曲と指導方法の提案—, 清泉女学院短期大学研究紀要, (37), 21-30, 2019. ほか.
- 4) 太田央子, 山中文, 渡邊康：保育活動における童謡・唱歌の機能, 相山女学園大学教育学部紀要, 11, 97-116, 2018.
- 5) 狩野：前掲書.
- 6) 山崎：前掲書.
- 7) 連：前掲書.
- 8) 太田ほか：前掲書.
- 9) 朴守賢：幼児の発達に適合した幼児歌曲の作曲の試み—楽曲分析とわらべうたをヒントに—, エデュケア, (38), 17-29, 2017.
- 10) 笠井キミ子, 久原広幸, 坂田万代, 横山浩平：保育教育における手遊び歌についての一考察, 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, (47), 1-11, 2015.
- 11) 秋山治子：今, 都内の幼稚園・保育園（所）でどのような歌が歌われているか—アンケートの集計と考察—, 研究年報, (17), 40-46, 2012.
- 12) 児嶋輝美：保育教材としての手遊び歌の現状と課題—データベースの作成を通して—, 徳島文理大学研究紀要, (77), 81-95, 2009.
- 13) 岩口：前掲書
- 14) 河原田潤：幼児保育現場で上げられる「子どもの歌」と考察 (2) —教育実習（幼稚園）アンケートによる幼児音楽について—, 常葉学園短期大学紀要, (39), 49-57, 2008.
- 15) 河原田潤：幼児保育現場で上げられる「子どもの歌」と考察—保育実習アンケートによる幼児音楽について—, 常葉学園短期大学紀要, (38), 103-112, 2007
- 16) 多保田治江：保育者養成における子どものうたの取り扱いについて (4) —アンケート調査に基づく分析—, 北陸学院短期大学紀要, (36), 13-27, 2004.
- 17) 中村千晶：幼児の歌に関する一考察, 聖和大学論集 A・B教育学系・人文学系, (33), 83-91, 2005.
- 18) 木目田芳美, 大貫礼子, 沢口尚子, ほか：手あそびうたの研究Ⅷ—保育園で歌われているうたの10年間の動向—, 日本保育学会大会研究論文集, (53), 266-267, 2000.
- 19) 岩口摂子：現代子どもの歌の研究 (1) —その二重構造におけるハーモニーの比較分析—, 宮城学院女子大学・同短期付属幼児教育研究所研究年報, 9, 11-25, 2000.
- 20) 山浦菊子, 丸尾喜久子, 中村千晶, 浅野葉子：幼児の歌う活動に関する一考察1—歌唱教材のアンケート調査を通して—, 聖和大学論集 教育学系, (25), 65-79, 1997.
- 21) 青木菰子：幼児の歌唱教材に関する一考察—和声を中心に—, 聖和大学論集 教育学系, (24), 236-279, 1996.
- 22) 多保田治江：保育者養成における子どものうたの取り扱いについて (3), 北陸学院短期大学紀要, (27), 23-40, 1995.
- 23) 梅澤由紀子：幼児の歌唱教材論ノート (1) —保育者への実態調査を手がかりに—, 愛知教育大学幼児教育研究, (4), 39-49, 1995.
- 24) 井口太：幼児歌唱教材の分析—歌詞の特徴の数量化による分析の試み—, 東京学芸大学紀要 第1部門教育科学, (44), 53-58, 1993.
- 25) 多保田治江：保育者養成における子どものうたの取り扱いについて (1) —, 北陸学院短期大学紀要, (25), 55-85, 1993.
- 26) 白石昌子：幼児の歌唱教材に関する一考察—実態調査と戦後童謡の検討を通して—, 日本保育学会大会研究論文集, (42), 578-579, 1989.
- 27) 村山貞雄：保育内容の理論, 明治図書出版, 1977.
- 28) 宮崎敏子：幼稚園・保育園における歌唱教材について, The journal of Nagano-ken Junior College, (27), 30-36, 1973.
- 29) 笠井ほか：前掲書.
- 30) 宮崎：前掲書, 青木：前掲書, ほか.
- 31) 井口：前掲書.
- 32) 村山：前掲書, 笠井ほか：前掲書, ほか.
- 33) 朴：前掲書.
- 34) 岩口：前掲書13).
- 35) 児嶋：前掲書, 89.
- 36) 笠井ほか：前掲書, 10.
- 37) 狩野：前掲書, 113.
- 38) 笠井ほか：前掲書, 8.
- 39) 秋山：前掲書, 43.
- 40) 秋山：前掲書, 43.